

# 令和5年度 学力向上重点指定校 報告書 船越中学校

## 1 学校の課題

※データ等を基にした学校の課題

- 令和4年度全国学力・学習状況調査において、数学の正答率が全国平均を12.4%下回っており、正答率30%未満の生徒の割合が40%を超えている。
- 説明しなさいという設問に対して、何を聞かれているのか、何を書けば説明したことになるのかが分かっていない生徒が多く、無回答の生徒が多い。
- 標準学力調査（令和5年度5月実施）において、思考・判断・表現の正解率が全国平均を下回っている。（1学年：-11.8% 2学年：-3.2%）  
→ 問題把握・論理的な思考・表現の仕方に課題
- 学校評価アンケート（中間評価）における「数学の授業がよくわかる」の問いに対し、否定的な回答をする生徒が約30%存在する。

## 2 研究主題

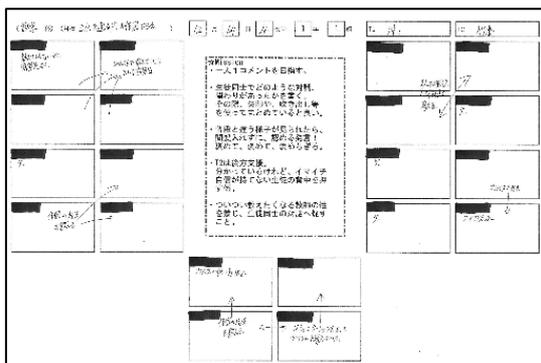
知識・技能を活かして課題を解決するための思考力・判断力・表現力の育成  
～授業カルテによる学習支援と体系的な振り返りによる思考の整理～

## 3 取組内容

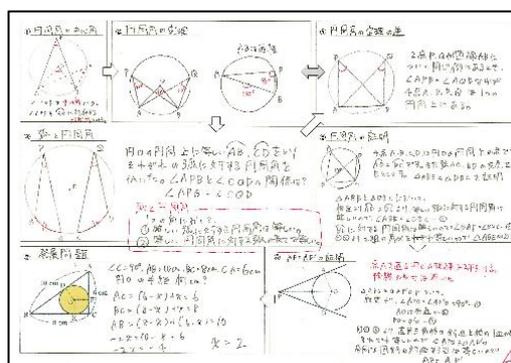
※1の課題解決に向けて、重点的に取り組む項目とその具体

### (1) 授業カルテによる個に応じた支援

- ・ Team Teaching (T.T) を行い、T2は授業カルテ【図1】の記録を行いながら、個に応じた支援を行う。T2については、数学教員以外にも、他教科の教員が配置される時間（週1ペース）もあり、様々な視点で個に関わる工夫を行う。
- ・ 生徒の状態や学習状況を記録しながら、前時の様子との比較や個の成長が具体的にわかるようにしていく。また、矢印等を使って、他者へどのように関わっているかを記録していくことで、授業担当者のみならず学級担任や学年教員が見て、学級経営や学年経営の一助となるようにもする。



【図1】



【図2】

### (2) 体系的な振り返りによる思考の整理と学習の自己調整

- ・ 単元を見通した授業計画を行い、ポートフォリオ【図2】を作成する。授業で理解したことを、簡潔にまとめる活動を習慣化することで、論理的思考力や表現力の育成につなげる。

(3) 思考力・判断力・表現力を育成するためのパフォーマンス課題

- 単元の導入と章末で、パフォーマンス課題を行う。プレパフォーマンスで導き出した解答が、ポストパフォーマンスでどのように変化したかを確認することで、単元を通した自己の成長の認識につなげる。また、パフォーマンス課題と協働的な学びを結びつけることで、他者の意見と照らし合わせながら、解・解法・最適解を導き出す実践を積み重ねていく。パフォーマンス課題を実践する中で、解答を導き出すために、どの既習事項を用いたかなど、理論的に記述させることで演繹的な力を育成することを目指した。

例) 数学 5章 相似な図形

あるピザ屋では、ミックスピザの値段が下のよう  
にサイズごとに決められています。大きさや値段  
の関係を考えたときに、MサイズのピザとLサイ  
ズのピザのどちらがお得でしょうか。

Mサイズ：直径 24cm, 2200 円

Lサイズ：直径 36cm, 3600 円

プレパフォーマンス

長さの比に着目し、Mサイズと結論

ポストパフォーマンス

面積の比に着目し、Lサイズと結論

- また、パフォーマンス課題の実践は数学のみならず、他教科へも広げ、各教科の特性を活かしながら資質・能力向上に向けて取り組む体制を構築している。

4 検証結果

※成果指標の検証方法および結果

○ 標準学力テスト 【思考・判断・表現の正答率】

	1 学年		2 学年	
5 月実施	本校：36.9%	-11.8%	本校：31.3%	-3.2%
	全国：48.7%		全国：34.5%	
12 月実施	本校：30.6%	+1.4%	本校：36.0%	+1.3%
	全国：41.0%		全国：37.9%	

- 思考・判断・表現の平均正答率が全国平均を下回る結果となった。
- 5 月実施に比べ 12 月実施は、全国平均との差を縮めることができた。

○ 学校評価アンケート（期末評価） 【数学の授業がよくわかる】

	肯定的回答	否定的回答
1 学年	65.7% (中間評価：70.2%)	34.3% (中間評価：29.8%)
2 学年	63.5% (中間評価：68.0%)	36.5% (中間評価：32.0%)

- 肯定的な回答をする生徒の割合が、中間評価と比べ、減少している結果となった。

## 5 研究成果

※成果・課題等

《成果(○)・課題(●)》

## (1) 学力向上

●○ 標準学力調査において、思考・判断・表現の観点の平均正答率が全国平均を下回る結果となったが、5月実施に比べて12月実施の方が全国との差が縮まっている。

○ 令和5年度全国学力・学習状況調査では、全国の平均正答率を上回り、前年度の同調査(同観点)と比較しても、観点別平均正答率が上昇していることから、学校として一定の学力向上が見られたと結論付けている。特に、「思考・判断・表現」の観点で一定の成果が現れたことは、取組内容の成果と裏付けることができ、知識・技能を活かして表現させる活動をこれからも継続させていきたい。

【令和5年度全国学力・学習状況調査(数学) 観点別平均正答率】

区分		全国	広島県	本校
R5	全体	51.0	49.0	54.0
	知識・技能	55.7	53.5	56.0
	思考・判断・表現	41.6	41.4	49.6

R4: 26.5  
↑23.1%

● 学校評価アンケートにおいて、「数学の授業がよくわかる」と回答した生徒の割合が年度の後半に向けて減少する結果となっており課題がある。わかったと感じられる授業作りを継続するとともに、自ら学び続ける「自立した学習者」を育成するために、生徒が主体的・探究的に学習に取り組めるよう課題を工夫したり自己決定の場面を取り入れたりするなど、授業改善を進めていきたい。

## (2) 全校体制の確立

○ 数学同士のT.Tでは教科の専門性を活かした支援を、他教科とのT.Tでは、様々な立場からの支援や声かけを行い、多面的に生徒の成長を捉えることができた。具体的には、次のような生徒の姿があった。

数学の苦手な生徒Aは、中々前向きに取り組むことができなかつたり、伏せるなど逃避したりする姿が見られたが、好きな授業(音楽)の教員がT2で入った時は、その教員の声かけて前向きに取り組む姿勢を見せるなどの成長が見られた。

その前向きに取り組む姿勢を、T1が把握し、「今日、頑張ってたね」と声かけをすることや、また前向きになれなくなりそうな時に頑張るように促す声かけを適切なタイミングで行うことで、前向きに取り組める回数が徐々にではあるが増えてきた。

○ 令和3年度情報教育実践校、令和4年度個別最適な学び重点指定校と、3年連続で指定校としての研究を行ってきており、中心となる教科は研究指定によって異なるが、中心授業の前には全学級授業公開を行い、研究指定を学校全体の課題として扱うことを大事にしてきた。教員が研究指定を教科のカリキュラムに落とし込んで単元構成を行い、パフォーマンス課題を設定することで、教科の特性を活かしながらも、学校全体として取り組む方向性が一致している状態を作ることができた。

○ 全校体制は教科教育のみならず、「総合的な学習の時間」のカリキュラムにも活かすことができ、今年度から始めた探究活動にも良い影響を及ぼしている。学年ごとの探究テーマに沿ったグループワークや、そのグループワークを活かして意見文の作成を行うなど、各教科で身に付けた資質・能力を発揮する取組につなげることができた。